KOM Town

神楽坂・大塚・目白エリアの店舗や企業を紹介する情報誌「コムタウン」

2014.4.1 VOL.1

Free

ご自由にお持ちください。

彩街

本紙はASA神楽坂・ASA大塚仲町・ASA目白が発行する地域活性情報誌です。地域の新しいお店・おいしいお店・オシャレなお店や昔からこの地域を拠点とされている歴史ある店舗や企業を紹介しています。新聞販売店ならではの機動力と地域に密着した取材力を活かし、最新情報を配信！ ぜひ、地域の皆様の日々の暮らしにお役立てください。

【発行・お問い合せ先】

明日のチカラ、届けます。
Himawarido

ASA神楽坂 〒162-0843新宿区市谷田町3−3 TEL.03-3268-3836
ASA大塚仲町 〒112-0013文京区音羽1-15-12 アルス音羽1F TEL.03-3941-3068
ASA目白 〒171-0033豊島区高田2-18-2 TEL.03-3971-9436

編集:株式会社朝日メディアネットワーク内KOM Town編集室 TEL.042-548-0578
発 行 日：2014年4月1日
発行部数：58,700部
配布地域：神楽坂、大塚仲町、目白エリア
※本紙記載の記事、写真、イラストなどの無断使用を禁じます。

本誌掲載の店舗情報一覧は下記の QR コードもしくはURL からご確認頂けます

▼URL はこちら! ※スマホ、ケータイ専用ページです。

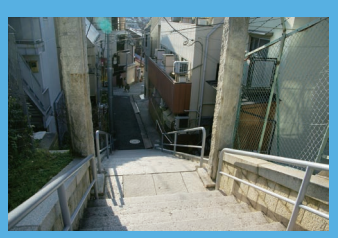
http://asa-ok.jp/komtown/list/

komtown 店舗情報

※「ページが見つからない」、「アクセスできない」場合は、QR コードまたは URL より直接アクセスをしてください。

Kagurazaka walks

かつての江戸・東京がひょっこりと現れる。



神楽坂は坂と路地の街である。神楽坂通り（早稲田通り）を中心に、右へ左へ、北に南に、さらには斜めに細い路地が入り込み、通りによっては緩急のある起伏を伴っている。

もともと東京自体、坂が多い都市ではあるが、神楽坂界隈はその代表的地域のひとつといっていい。その理由だが、東京の地形は荒川から多摩川の間に広がる武蔵野台地と荒川周辺から東へと広がる東京低地に大別され、河川の侵食によって、さらに台地と谷が複雑な起伏を形成している。そのため東京23区内には600以上の坂があるといわれ、特に千代田、港、新宿、文京区が全体の約6割を占めているそうだ。神楽坂は新宿区に位置するため、その地勢が示す通り、周辺には「軽子坂」「地蔵坂」「弁天坂」「逢坂」「三年坂」「赤城坂」「朝日坂」「御殿坂」「芥坂」など、さっと上げただけで十数の坂が点在しているわけである。

坂の名前は、風景、町名・地名、大名屋敷・寺社仏閣名、人名、言い伝えになどにあやかったものがほとんど。例えば「神楽坂」は、この坂で神社が奏でる神楽の音が聞こえたことから名付けられたという（坂の途中にあった高田八幡の御旅所で神楽を奏した、赤城明神の神楽堂があったほか、諸説あり）。また坂にちなんだ逸話も残っており、赤穂浪士の一人、堀部安兵衛が決闘の際に通ったとされる「三年坂」には、「躓（つまず）くと三年の内に死ぬ」という俗信があるなど、調べてみるとなかなか面白い。

It continues to the next page.

KOM Town

coupon card

有効期限：2014年7月31日まで

●KOM Townに掲載されているクーポン特典付の全店舗にご利用できる共通クーポンカードです。
●各店指定のクーポン特典をご利用の際は、このカードもしくは本紙を店舗スタッフにご提示ください。
●各店舗広告内のクーポンQRコードから、Webクーポンをご利用頂く事も可能です。

Kagurazaka walks

「いまとむかし」が違和感なく混在し 街に流れる時間だけは、ゆっくりと経過しているようだ。

神楽坂の主な路地は「小栗横丁」「兵庫横丁」「わらだな横丁」「かくれんぼ横丁」「見番横丁」「本多横丁」など、「通り」ではなく「横丁」と呼ばれる。「神楽小路」「芸者新道」といった例外もあるが、後者の名の由来は、お店を移動する芸者が混雑する表通りを避け、抜け道として使ったことに因む。今でも料亭へ向かう左褄を取る優美な姿に遭遇できるそうだ。

路地の中でも、花柳界華やかな時代を感じられるのが「兵庫横丁」。見越しの木々がのぞき、黒塀が続く石畳の路地には、山田洋次氏をはじめ、映画監督、作家、脚本家が投宿し、多くの名作を生み出した「ホン書き旅館」の「和可菜」、花柳界の伝統を伝える料亭「幸本」などの老舗が並ぶ。

横丁にはそれぞれ個性があるが、銭湯「熱海湯」があることから「熱海湯通り」とも呼ばれる「小栗横丁」、小さな飲食店が軒を連ね、昭和30年代の風景を彷彿とさせる「本多横丁」など、どの横丁にも懐かしい雰囲気が漂っている。

坂と路地を堪能した後は、老舗をめぐってみたい。神楽坂には江戸時代から続く店が数店、明治・大正時代創業の店は10店以上あるという。そのひとつが「相馬屋源四郎商店」である。創業は1659年。紙漉き職人の初代から始まって、後に和紙問屋に、戦後は文房具屋として営業。

明治の中期、尾崎紅葉の助言で原稿用紙を洋紙「相馬屋製」にして売り出したことから「洋紙原稿用紙発祥の店」といわれ、また、これを夏目漱石、北原白秋、石川啄木、坪内逍遥といった文豪たちが愛用したため「文豪御用達の店」としても知られている。文豪たちの愛した原稿用紙は、今も購入することが可能だ。

味の老舗も、こだわりの季節素材の揚げたてが楽しめる「天婦羅　喜楽」、八丁堀の魚屋だった初代が創業し、極上の魚が堪能できる「うを徳」など、数多くある。ほかにはどら焼きが名物の「和菓子処 清水」、定番の「神楽坂饅頭」をはじめ、上質の素材を使った季節の和菓子が自慢の「五十鈴」などの菓子店がある。

都内でも数少なくなった江戸東京の歴史を目と舌で体験できる街・神楽坂。近年の再開発などで景観は変わっていくのだろうが、街に息づく文化と伝統は途絶えることなく、継承されていくのだろうと感じた。

ほんの一本、路地に入ると別世界が現れた。人ふたりが擦れ違える程度の細い石畳、大小の坂道、瓦屋根の木造家屋、黒塀、矢来、竹林の小庭……古写真でしか目にしたことのない風景が、神楽坂では今も息づいている。近くには目白通り、大久保通り、外堀通り、そして首都高速が走り、周辺に企業が点在するビジネス街にありながら、この一角に流れる時間だけは、ゆっくり経過しているように感じられるのだ。

江戸情緒の香りが今も残り、また花柳界としても知られる神楽坂は、全国から多くの人が足を運ぶ、東京を代表する観光地。その始まりは戦国時代にさかのぼる。赤城山麓（群馬県）の豪族大胡氏一族の大胡重行が、北条氏康の招きを受け、永禄年間に武蔵国牛込へ移住し、牛込城を築城。「寛政重修諸家譜（江戸幕府が編修した系譜集）」によると、その後は牛込氏を名乗り、徳川幕府に仕えたとされる。

花柳界隆盛のルーツ、行元寺跡に作られた「寺内公園」

江戸幕府が開かれた1628年頃、大老・坂井忠勝が現在の矢来町に屋敷（牛込下屋敷）を拝領。この時、江戸城の外濠・牛込見附と屋敷をつなぐ「大老登城道」が造られた。これがのちの「神楽坂」である。徳川三代将軍・家光は、忠勝の屋敷に100回以上足を運んでいるが、もしかしたら神楽坂を通ったかもしれない。

神楽坂が、歓楽街として脚光を浴びるようになったのは江戸中期のこと。寛政4年（1792年）、徳川家康建立、水戸光圀が麹町に再建した徳川家の祈願所「善國寺」の移転がきっかけである。寺に祀られる毘沙門天が商売繁盛の神と言われ、「江戸七福神」のひとつとして人気を集め、門前には露店が軒を連ねた。さらに「赤城神

ここに移転した赤城の豪族が創建したという「赤城神社」

社」「出世稲荷神社」の縁日、「行元寺（現在は存在しない）」、神社周辺の岡場所の賑わいも加わって、多くの人が物見遊山に訪れるようになる。

幕府が瓦解し、明治の世になっても、神楽坂では縁日に変わらず人が集まり、岡場所は花柳界へと発展をとげていく。また、ここに居を構えた尾崎紅葉をはじめ、北原白秋、泉鏡花、夏目漱石など多くの文人墨客が闊歩し、神楽坂の賑わいは衰えることはなかった。こうして昭和12～3年頃には600名を超える芸妓を抱え、神楽坂花柳界は最盛期を迎えるが、太平洋戦争は華やかな街に影を落とし、ついに昭和20年（1945年）の空襲で消失。しかし、神楽坂の灯は消えなかった。復興の努力を重ね、昭和30年代後半には高度成長期の追い風に乗って、第二の隆盛期が訪れる。多くの政治家や社用族が足を運び、神楽坂花柳界は、再度花を咲かせたのである。

それから半世紀。時代は平成に変わり、周辺再開発などの影響で、神楽坂は花柳界としての面影をわずかに残すにとどまっている。現在は料亭が数軒、芸妓は20数名。しかし、毎年春（4月初旬）に開催され、芸妓衆が雅で華やかな唄と踊りを披露する「神楽坂をどり」、料亭で催される踊りの会など、江戸の芸能文化を粛々と伝え続けている。

街の表情も、もちろん往時と同じではない。神楽坂通りには各種チェーン店やコンビニエンスストアなどが並び、それぞれの通りには、食の東西を問わず、若者好みの新しい飲食店の看板が掲げられている。そんな中、古くは江戸時代から商いを続けている老舗が健在であり、寺社仏閣では由緒ある祭礼が今も行われるなど、ここでは「いまとむかし」が違和感なく混在している。近隣の学生から、仕事を終えた会社員、そぞろ歩きを楽しむ年配者のグループまで、年齢性別に関係なく、神楽坂という街に人々がひきつけられる理由は、そこにあるのではないだろうか。

とはいえ、ここを訪れたなら、やはり古き良き江戸～東京の姿を求めずにはいられない。かつて武器商人の町であったことが名前の由来で、鎌倉時代から続く、神楽坂界隈でも最も古い道「兵庫横丁」。

黒塀に囲まれた路地で、後に妻となる馴染みの芸者・桃太郎を伴う泉鏡花の幻とすれ違ったような気がした。

（ライター・吉岡里美）

黒塀が続く街並みに建つ、ホン書き御用達の旅館

徳川家康建立、水戸光圀が再建。毘沙門天を祭る「善國寺」